

内村鑑三『ロマ書の研究』 第四二講 救いの完成（九） 八章三一節以下

独立系研究者 倉井香矛哉

・概述と問題提起：「パウロの歓喜」と「われ」―内村の「凱歌」をめぐる

「八章二十九節において、パウロは、神の主目的はキリストを多くの兄弟の中に嫡子たらしめたためにして、キリストの栄化が主、信者の栄化は従であるとの奥義を説いた。」（『神中心主義、キリストが嫡子である』）

「神の、人を救う順序」について、「第一は、あらかじめ知る事、第二は、あらかじめ定むる事、第三は、招く事、第四は、義とする事（キリストの十字架のゆえに罪を消除して義とする事）、第五は、栄えを賜う事すなわち栄化せしむる事である。」（※約説では、「予知、予定、聖召、為義、賜栄」とされている。）

（註記：第一～四については「人の過去現在に関するもの」であるのに対して、第五は「未来において与えられるもの」である。）

↓ここでは、三十節に至るまでの「パウロの歓喜」が絶頂に達する様子について語られている。すなわち、「救いの完成、全き勝利、限りなき生命、義の冠、栄光の体を与えらるる事」が「一点の疑いもなき確実の事」となったと断言されている。第四一講までと比べると、内村自身の信仰的な独断を含んだ言説となっている。

【発表者による留意事項】冒頭の箇所において明らかなく、第四二講は、論理的な解説というよりも、「パウロの歓喜」を重ねた「われ」＝内村自身の信仰の凱歌といったほうがよい。さてしかし、このような信仰的独断を含む言説は、読み手にとって、キリスト者として生きる覚悟を厳しく問い直す内容となっている。現代に生きる者は、これほどまでに神中心の人生を歩めるだろうか？（問題提起）

・神の大目的：「万物」―「すべての恩恵」の賜与

三十一節以下：「神はその大目的を達成するためにわれらを救うのである。」「万物」＝サンデー、マイヤー、ゴデー、ビート、ジョン・ブラウンの解釈が列挙されているが、それらを踏まえつつ、内村は、「すべての恩恵をさしたるもの」であることが「明らかである」と断定している。

「神すでにわれらの味方である、たれかわれらに敵し得ん、神すでにひとり子をわれらに賜う、などが彼と共に万物を賜わざらんやと述べたるパウロは、なお進んで勝利の確実を高く叫ぶのである。」「

↓内村は、前述の「あらかじめ定むる事」（予定）に基づき、パウロの「勝利の確実」を力強く語っている。その信仰的熱情の発露として位置づけられるのが、三二二ページに引用されているロマ書八章三三～三五節である。それは、八章冒頭の「イエス・キリストにある者は罪せらるることなし」という言葉に対応し、長年にわたってパウロ自身を苦しめてきた「罪の問題」を打ち砕く「勝利の歓喜」そのものである。

・「人生の最大戦争」としての「サタンとの決死の戦い」

「われ今やキリストに頼めば、勝利の連続と恩恵の雨下あるのみである。」（『追撃戦』の比喩）

「人生の最大戦争において、サタンとの決死の戦いにおいて、防禦戦の苦しさをしみじみと味わっていた者が、ある時、天より光明臨みて、敵はたちまち敗走し去り、これを後より追う戦いに移りし時の快き、楽しきはいかばかりであろうか。パウロが人生の最大戦争において追撃戦に移りしが、すなわち三十三節以下である。」「

↓内村によれば、「人生の最大戦争」における「追撃戦」とは、「勝ち得て余りあるという状態」である（これは、ロマ書八章三七節にある表現である）。

「いかにして、かくもたやすくすべての艱難痛苦に勝ち得るか。それは、自力で戦わないで、キリストの蔭に自己を隠し、彼に代わって戦っていただくからである。」「

↓この受動的な主体性を前提として、内村は、「ただキリストに隠れよ」と語る。そして、そうすれば、「恐るべき強敵は自然とついで去る」と断言する。この信仰的な確信に基づいて、彼は、「ゆえに信仰を隠すなかれ」と聴衆に薦めている。（問題提起：二一世紀の世俗社会においてはどうか。）

・パウロの「偉大なる確信」

パウロは、三十八、三十九節において、以下のような「偉大なる確信」を発表している。すなわち、「死」(「**肉体の死**」)、「生」(「**生に伴う患難と誘惑**」)、あるいは、「執政」(「**天上の大天使**」)、「力あるもの」(「**地上の権力者**」)、さらに、「今あるもの」(「**現在あるすべての事と物**」)、「後あらんもの」(「**将来起こるすべての事と物**」)、「あるいは高き、あるいは低き」(「**天界と地獄の神秘、異象、無知の力**」)のいずれによっても、「われらを神の愛より離らし得ない」というのである。(古代キリスト教的宇宙観)

「右は、パウロ時代の宇宙観を知って読むとき、そしてさらにこれを現代科学の与うる宇宙観に照らして読むとき、興味の尽きぬものがある。」(中略)「実にパウロのここに述べたるクリスチャンの確信は、今やさらに幾倍かの強さを加えたのである。」

↓内村は、「パウロ時代の宇宙観」と「現代科学の与うる宇宙観」とを対照させることによって、時代を超えて普遍なる「クリスチャンの確信」を明らかにしている。

・「われら自身の罪」についての語り

先に示したパウロの「偉大なる確信」は、「自分から信じた」のではなく、「実験上信ぜざるを得ざるに至った」と内村は解説している。ただし、「パウロのこの雄偉なる声に接して、ここに一つの問題が起こる」と内村は指摘する。すなわち、「われら自身の罪は、われらをこの神の愛より離らすことはないであろうか」と。

「他のすべての事物はもはやたしかに神の愛よりわれらを離らさない。しかし罪はいかに。罪人たるわれらは不
断の不安の中に住まねばならない。さらば信仰生活は堪えがたき重荷である。しかしながら、今までの神の愛は、
われらの罪もまたわれらをこれより離し得ないことを信ぜしめる。われを予知し、予定し、召し、義としたる神
は、いかで最後に至ってわれを捨てるであろうか。」

「なんじらのうちに善きわざを始めし者、これを主イエス・キリストの日までに全うすべしと、われ深く信
ず」(フィリピの信徒への手紙一章六節) ※「主イエス・キリストの日」キリストの再臨とこれによる審
判および万物復興の日、パウロはこの日が速やかに来ることを信じていた。(黒崎幸吉註解より)

↓この前後の論旨には、論理的には飛躍がある。しかしながら、以下に「われ」を主語とする語りが挿入される

ことによって、論理的飛躍は語りの場のなかで解消されている。

「われはしばしば罪を犯した者である。しばしば聖旨にそむいた者である。そして今もしかり、後もしかるかも
知れない。弱きわれのこととて、自己について何の保証をもち得ない。しかしながら神の愛はわれを堅く守り
て離れない。われの深き罪といえども、この愛よりわれを遠ざけないのである。」

↓第四二講において、内村は、当該箇所の聖句の翻訳を批判的に検討し、聖書学者の学説を紹介するという研究
上のプロセスを十分に踏まえた上で、最後に「実験上信ぜざるを得ざるに至った」「われ」自身の行為遂行的な
語りを(壇上において)実演している。すなわち、パウロの叙述を解説する内村自身が、今や、他ならぬ自己の
「実験」を雄弁に「人々」に語っているのである。「わが救われること」(※「われら」=複数形ではなく、「わ
れ」=単数形)は「今やあまりに確実である」という内村の確信は、「理論上の困難」にもかかわらず、「クリス
チャンの個人的実験」として、高らかなる「喜びの凱歌」として響いている。

第四二講 約説 救いの凱歌

「人の救われるはおのれによらず、神による。おのれのためにあらず、神のためである。ゆえに救いは確実であ
る。また安全である。その順序は、予知、予定、聖召、為義、賜栄である。その目的は、「その子を多くの兄弟
の中に嫡子たらしめんがため」である。「万物は彼より出で、彼に倚り、彼に帰る」とある。」(「**神中心主義**」)

「キリストにある者は罪せらるることなし。」「パウロが何よりも恐れた事は、最後の神の裁判において罪に定め
られる事であった。」(「**再臨思想**」)「しかしてこの事なきを保証せられて、彼は凱歌を掲げざるを得なかった。」「
パウロはここに、人の子を神に訴うる者、すなわちサタンを追窮しつつあるのである。」

「キリストにある神の愛である。漠然たる神の愛ではない。明白に指定せられたる神の愛である。」「万有は正義
の上に立つ。万有はこわれても正義はこわれない。しかして正義の上に立つ救いなければ万有もこれを翻すことあ
たわずとパウロはいうのである。」

「さらば「わが罪はいかに」と問う者もある。」「天使よりも大天使よりも、死の苦痛と生の誘惑よりも危険な
るものはわが心である。」「(されども)神はわがうちに働きて、わが救いを完成したもう。」